

LL 教室におけるビデオに関する考察

高橋 祐子

家庭用ビデオの急速な普及により、文字言語よりも聴覚言語、更には聴覚言語だけではなく視覚言語にも頼る傾向が、世代が若い程にあるようである。文字や音声を情報信号として受信しても、それが視覚的信号と結合した状態でしか、学習者の記憶領に、保存されていない。それ故に、ばらばらの状態の信号を発信しても、学習者に対して理解できないという苦痛ばかりを与えて、教育的効果はマイナス方向に働くようである。

実際に、学習者の知識を総動員して、視覚だけに頼って、既習の英語を使って発信用の英語を作らせることをねらった、マームだけのビデオ教材がある。しかし、これは教師側にも学習者側にもあまり評判はよくないようである。普通の映像と同じように、声を出さないで動いている人物は、見る側に音声的孤独感と言う苦痛を与えるのである。見る時間が長ければ長いほど、その傾向は高い。

また、一方において、従来の音声テープだけに頼っていた LL 教室では、聴覚だけに頼って、視覚的事象の確認ができないという精神的苦痛と疲労とを学習者に与え、悪くは英語嫌いを増やしてしまうこともあるようである。

以上のことを踏まえて、本短期大学部の LL 演習 1 においては、音声入りのビデオ教材を 1 年間使用した。

ここでは、私が担当した 3 クラス (A, D, G) を中心に報告考察したい。

教科書は、文字言語に頼らないで音声言語の受信と送信とに慣れさせ

るために、実用英語検定の3級レベルから2級レベルへと移行していくように教材編成された、*Fresh LL English Course* を使った。各課は“Basic Dialogues”, “Conversation”, “Aural Check”, “Review”, “Communication Drills”, “Dialogue Practice”から成っている。すなわち、それは、基本表現の確認、そこから発展した新しい表現の学習と確認及びその練習、そして学習事項の発展学習、, いうように、基本的には Pre Lab. から Post Lab. まで、順序立てられた学習内容構成を持っている。

また、4課目毎に“General Review”と言う単元テストがあって、そこで既習事項の再確認をする。その課は、“Summary Passage”, “Comprehension Check”, “Questions and Answers”, “Quick Response Drills”, “Dictation Drills”から成っている。

このテストにおいては、その単元でビデオを使ったか使わないかによって、習熟度の差がでる。特に、内容の理解度を問うような“Comprehension Check”においてその差は顕著である。その単元で、ビデオを使った場合は習熟度は99%であるが、使わない場合は88%である。ここに表わされた11%という習熟度の差は大きい。

これは、学習の際に、聴覚だけが独立して働いているのではなく、視覚も同時に働いているということを示している。再度同一の学習内容を提示する際に、片方だけの知覚を刺激するよりも、両方とも知覚を刺激した方が、記憶の作動が速く、その定着度も高いのである。

では、ビデオ教材に対して学習者側はどのように感じているのだろうか。それは、今年度私が担当した授業の進め方を論じてから考察するつもりである。

まず最初に、各課で習得すべき基本表現を、“Basic Dialogues”の4文を聴覚だけで聞いて短時間で暗記する事によって、確認させた。これに対しては、無意味な時間の浪費と感じた学習者もいれば、次の“Conversation”を聞くに当たって学習の準備ができて有効であったとみる学習

者もいた。教科書の編集者は前者の立場をとり、余り時間をかけないほうが良いとしている。実際には、2～3分だけそれに当てたが、暗記はほぼ完璧であり、その学習目標到達度は高かった。

次にビデオによって、暗記した表現が実際にどのように使われているかを観察させた。それから、ビデオで言われた会話と全く同じものを音声テープによって聞かせて書き取らせた。書き取った会話を口頭練習させ、一定時間を与えた後に、成果発表を劇風にさせた。

ここで、音声出力レベルを0にしたビデオを見せながら、出てくる映像のコマの動きに合わせて台詞を言わせていたとすれば、会話のスピード感の練習にもなったであろうし、ゲーム性も出ていたであろうと思われる。

この時、一方通行の受信レベルの学習にならないように、学習した“Conversation”の内容や構造などを土台にした学習者独自の会話文を作らせた。このとき程学習者が生き生きと見える事は、授業時間内に余り無いようである。実際、そういう創作活動があったので、LL 教室での学習に意欲的になれたという声も、学習者の中にあつた。

学習事項の送信レベルまでの定着を図ったのち、再び本題の内容把握に戻る為に、ビデオによる復習をさせた。それから“Aural Check”に進む。この場合、ビデオによる復習作業があれば、質問の音声テープを聞いてすぐに答えられるようであるが、そうでない場合は少し答えるのに時間がかかるようである。つづいて、“Review”に進むが、これも“Aural Check”と同じような結果をみる。問題は、ここは記号式選択ではなくて書き取り式なので綴りの間違いが少し見られる。CAI(Computer Assisted Instruction)に綴りの即時採点を期待したい。

次に、学習事項の再定着とその発展を図るために“Communication Drills”で簡単な音声テープによる‘cue’を聞かせて Pattern Practice を行なわせる。これは、ともすると、機械に統制された学習になり、学習

者の自由創作意欲を抑圧することになり、LL-system に対する嫌悪感を抱かせる可能性もある。それ故、簡単に1度だけ練習させて、次の学習段階に進んだ。

最後に、実際のコミュニケーションの場で会話ができるように、“Dialogue Practice”にて発信用の英語と受信用の英語とを、交互に口頭で言わせた。この場合においても、“Conversation”の場合と同じように、類似の自由創作による会話を作らせて発表させ、それについて批評を加えてやった。すると、学習者の成就感も高まり、更に学習意欲も増したようであった。

ここで、次の課に進むのであるが、その前に、先に学習した“Conversation”に更に肉付けをした形の“Story”というビデオを見せた。この段階では既に、学習事項はほとんどすべて理解済みなので、学習者は音声画像共に視聴者として楽しめるようであった。字幕無しで英語のビデオを理解できるということは、学習の成就感を学習者に与える。この成就感は次の学習への意欲上の準備をさせる。

その学習意欲を更に増す為に、“General Review”を終える度に、他の一般ビデオを見せた。学習レベルに出来るだけ近付け、また1回に見切れる程度の上映時間を考慮したために、アメリカの子供用アニメーションという少し幼稚なビデオを使った。音声に反応する速度は50%位の学習者に即時性がみられた。

さて、このようにビデオを使つてのLLの授業に対して学習者がどのように感じていたのであろうか。

学習者は、教育的に理想とされる面では、楽しくて、理解が深まり、為になったという。しかし、その反面、娯楽指向もあるようで、気分転換のために、学習レベルではなかなか理解できそうにないような映画を見たい、と言うような学習者もいる。これでは、楽しくても英語の学習の意味が薄れてしまうので、素直に受けとめられない。しかし、学習者

が娯楽性のある程度期待していることは、考慮してやらないと、LLの授業を苦痛に感じてやる気を失うこともあるだろう。

この傾向は、JACETが全国の約1万人の学生に対して行なった実態調査にも出ているようである。但し、女子の学習者に対してだけと言ったほうが良さそうな数値が出ている。すなわち、ビデオに好意的なのは男子50.7%、女子64.8%で、非好意的なのは男子18.0%、女子8.2%という数値がでているのである。JACETでは、これを女子のほうが感性が高いからだとみている。

し好の面ばかりではなく、私の担当したLL演習の学習成果をみても、女子は、確かにビデオを学習効果の高いものと見なしているようである。

男子は、あくまでも私個人の推測であるが、ビデオ教材の内容よりも、その作成及び上映の方法の方に注意が向いてしまい、学習用であるが上にある程度制限されざるをえない芸術性の限界を、認めることができないのではないだろうか。

そうすると、ビデオ教材を使う時には、男女によっても十分吟味の上、違った教材を使わなければならないことになる。幸か不幸か、本短期大学部は女子のみなので、現行のままでもまだ問題は余りなさそうである。

もう一つ、JACETは非常に興味深い数値を、得ている。英語教育において、視聴覚機器のなかで、ビデオ付きのLLが望ましいと考えている学習者は25.4%で、他の機器とは大差をなしている。原因は、恐らく、作秋に本短期大学部で調査した結果と同じように、学習者が英語の授業に、現場に即した聞き話す能力の育成を期待しているからであろう。

一方において、JACETによれば、教師側が一般英語に期待する分野は圧倒的に「読み」のようで、全国の高専以上の英語教師の80.3%を占めている。

どんなに技術的に高度な英会話術を身に付けても、外国の文化事情についての知識が不足している限りは、外国人とのコミュニケーションは

低レベルに留まってしまうのではないかと、教師側の私は考える。

だから、LL 演習については、英語の初歩的会話術だけではなく、国際コミュニケーションの手段としての英語を学生に使えるようにさせてやりたい。

コミュニケーションの手段として英語を考える場合、やはり現場を教室の中に持ちこんで見せてやりたい。持ち込める現場に限界があるので、時間的制約を受けなくて済むように、あらかじめ録画されたビデオなどが有効である。録画ずみのビデオならば、学生の反応にあわせていくらでも調節がきく。

この場合、ただ単に映像を見せてしまっただけでは、学習者は何を目的にビデオを見ているのか分からず、ただの気分転換用の娯楽番組と思ってしまう。ビデオを見せる前に、視点を指定し、メモを取るように指示したほうが良い。それによって文化背景の理解を深めることになるからである。これが、英語と言うコミュニケーションの手段としての言葉に対する関心を更に高めることになるであろう。

実際に、上野辰美先生は、英語では無いが、へき地の子供達に対して映像メディアに関する調査をして、①語彙が豊富となる、②社会事象についての関心が高まる、③反応速度がいちじるしく高まる、④学習活動が活発となる、などの言語教育的に有効な結論を得ておられる。

学習者の立場と教師の立場との両方を考慮すると、LL 演習の課題は、単純に音声レベルからのアプローチに留まらず、国際コミュニケーションの手段として実用英語の4技能の育成と外国事情も併せて指導していくことになりそうである。それには、ビデオを有効に活用して、楽しくするための授業を目指していきたい。現行のビデオ付きのLL教室だけでは、「書く」能力の育成に対しての徹底した指導が難しいので、語学演習室でのCAI-systemを今後教育の現場に活用し、研究していきたい。

参考文献

1. 安藤賢一編 *Fresh LL English Course*
(ワークブック, 指導書, ビデオソフト解説書) 大修館 1985年
2. 浅野博著 「LLと英語教育」 東京書籍 1976年
3. 上野辰美編 「視聴覚教育」 学苑社 1978年
4. 社団法人電気通信学会 「教育機器とそのシステム」 1972年
5. 大学「一般英語」教育実態調査研究会 (JACET)編
「大学英語教育に関する実態
と将来像の総合的研究(I)—教員の立場—」 1983年
6. 大学「一般英語」教育実態調査研究会 (JACET)編
「大学英語教育に関する実態と
将来像の総合的研究(II)—学生の立場—」 1985年
7. Jack Lonergan, *Video in Language Teaching* Cambridge University Press, 1984